

## レオン・ワルラスの経済学史観 - 純粋・社会・応用経済学の起源

御崎加代子

(滋賀大学経済学部)

### はじめに

本報告の目的は、レオン・ワルラス (Léon Walras, 1834-1910) が、純粋経済学・社会経済学・応用経済学の体系を構築する際に、どのように過去の経済学説を研究し、どのように経済学史を解釈したかということ、明らかにすることである。

ワルラス自身は、経済学史をテーマとした著作を残したわけではない。しかし、マルクスやケインズなど他の経済学の巨人たちと同様、ワルラスも過去の経済学説の綿密な考察によって、自らの経済学を築き上げた。ただしこれは、シュンペーターが示すような単なる「純粋経済学＝一般均衡理論」の形成史ではない。ワルラス自身は、青年時代から多くの経済学者や社会主義者を、社会経済学・応用経済学も含む広い視野でとりあげ、そこから多大なる影響を受けている。多くの研究者が、ワルラスの一般均衡理論の起源について研究を重ねてきたが、純粋経済学のみならず、応用経済学と社会経済学をも視野に入れたワルラス経済学の形成過程については、その詳細がほとんど知られておらず、誤解されている部分も少なくない。

もちろん従来の研究史においても、ワルラス・モデルの理論的特徴を論じるために、古典派との関係がとりあげられることもあった。しかしこれはイギリス古典派を中心軸に据えた「古典派」対「新古典派」という現代の問題意識に基づいたアプローチが多かった。確かにワルラスは『純粋経済学要論』の中でリカードやミルに言及しているが、実際にはワルラスも認める通り、イギリス古典派からの直接的影響は無に等しい。また彼自身のイギリスの古典派に対する見方は、現在の一般的解釈とはかなり違う部分も見受けられる。そこにワルラス経済学を育んだ思想的歴史的状況の反映をみることもできるし、ワルラスの思想の独自性を読み取ることもできる。

このように、このテーマをとりあげることは、ワルラスの思想を深く理解するためだけでなく、経済学者にとって経済学史研究の意義や、現代的な解釈とは異なった経済学史観などを示すためにも有効であると思われる。

### 1. ワルラス純粋経済学の起源とフランスの伝統－シュンペーターの解釈をめぐって

ワルラスは、限界効用理論と一般均衡理論の設立により、現代経済学の祖となった。従って、ワルラス経済学の形成過程を問うことは、現代経済学の起源を示すことにもつなが

り、多くの研究者たちがとりくんできた。このようなアプローチの古典的な例としてあげられるのが、シュンペーター『経済分析の歴史』（1954）である。

シュンペーターは、ワルラスの純粋経済学すなわち一般均衡理論の確立を、経済学史上最高の貢献と絶賛し、経済学の歴史をそこに到達するプロセスとしてとらえようとした。そしてシュンペーターは、ワルラス一般均衡理論の起源を、フランスの伝統の中に見いだそうとした。ワルラス自身が『純粋経済学要論』の中で認めている、父オーギュストやクルノーの影響だけでなく、さらにさかのぼって、ボワギルベールやフィジオクラート、イスナール、J.B.セーなどに、インスピレーションの源泉を見いだそうとしているのである。

ただし、シュンペーターは、ワルラスの経済学体系を構成する他の二つの分野「社会経済学」と「応用経済学」については、きわめて低い評価を下していた。しかしワルラス自身はといえば、純粋経済学は、正義を原理とする社会経済学と効用を原理とする応用経済学の基礎理論にすぎず、この三つが完成して初めて、公正と効率が両立する社会システムを実現するための理論的指針が示せると、生涯信じていたのである。

この三つの経済学体系の関係を簡潔に示せばつぎのようになる。ワルラスは、純粋経済学において自由競争の効率性（すべての市場参加者の満足極大）と、進歩する社会における地価と地代の上昇（稀少性価値理論による）という二つの定理を証明し、それを根拠として、社会経済学において、土地国有化論と労賃免税のシステムを主張し、応用経済学において現実経済における自由競争の組織化、国家の市場介入方法を提言した。

そこで、このような三つの経済学体系を視野に入れた、ワルラス経済学の起源をフランスの経済学者たちに見いだそうとすると、どのようなことがわかるか、フィジオクラート、イスナール、J.B.セーを例に、まず示していきたい。

## 1. フィジオクラート

シュンペーターは、ケネーの経済表には経済諸要素の相互依存関係という概念が含まれ、同時にケネーが消費者の欲望を基礎に価格を分析しようとしていたという点を強調することによって、ワルラス一般均衡理論の起源をそこに示そうとした。

ワルラス自身は、『純粋経済学要論』において、他の多くの経済学者たちと同様、農業のみを生産的とするフィジオクラートの主張を批判し、非物質的な富の概念の欠如をその原因とした。また経済表には価格理論が欠如しているために、与件と未知数が混同されていることも指摘した。

しかしこのような純粋経済学上の限界にもかかわらず、ワルラスがフィジオクラートを評価するのは、彼らの土地単一税の主張とワルラスの社会経済学における土地国有化論、彼らの自由競争の主張とワルラスの応用経済学における生産への自由競争原理の適用の主張との間に共通点が存在するからで

ある。

## 2. イスナール

多数商品の交換価値を連立方程式によって、史上初めて表現したイスナールは、ワルラス一般均衡理論の先駆者として、シュンペーターにあげられ、その後、その主張はジャッフェをはじめとする研究者たちからも注目された。実際、富の分類、連立方程式の使用、価値尺度財の採用、純収入率の価格決定法など、イスナールとワルラスの純粋経済学が共有する分析道具は多い。実際、ワルラスは『純粋経済学要論』の発表後、ジェヴォンズと数理経済学者の先駆者リストを作成し、そこにこのイスナールの名をあげた。

しかしワルラスが実際、純粋経済学の形成過程において、実際にいかなる影響をうけたのか、検証することは難しい。父オーギュストにも、また初期のワルラスの著作にもイスナールの名は一度も登場しないからである。

少し見方をかえて、フィジオクラートとほぼ同時代人であるイスナールの政策的意図を考察してみると、それは一貫してフィジオクラートの土地単一税に対する批判であることがわかる。このように純粋経済学においては多くの類似点が存在するにもかかわらず、社会経済学のレベルでは、イスナールとワルラスの明確な断絶が存在する。

## 3. J.B.セー

セーは、シュンペーターが考えるフランスの伝統の重要な要素「効用価値論」の系譜に属し、シュンペーターにならって、ワルラスや現代経済学への影響もそのような観点でとらえられることも多い。

しかし実際には、ワルラスの純粋経済学と社会経済学の基礎となる稀少性の価値理論は、セーの主観的価値理論の批判を意図した父オーギュストの稀少性概念をから出発していることは注目すべきである。ワルラスがこの稀少性概念に限界効用という意味を付したのは、『純粋経済学要論』を公刊する直前である。

また純粋経済学のレベルにおいて、ワルラス自身は、セーから土地、人的能力、資本の三つのサービス論を受け継いだことを認めている、また企業者概念など、他にも多くの分析道具を学んだと考えられる。

しかしワルラスの社会経済学に多大なる影響をおよぼした、父オーギュストの所有理論は、そもそもセーの経済学が効用の実現のみを目指し、正義の観点が全く抜け落ちていることに対する反論として、構築された。そのため、

ワルラスも自らの経済学体系を構築するに当たって、セーの経済学方法論を激しく批判した。その他、セーやセー学派が数学を経済学に適用することを認めなかったことなど、社会経済学や経済学方法論においては、ワルラスとセーの重要な対立点は多く存在する。

またワルラスの応用経済学が、国家の介入によって自由競争を組織化するということという主張が、セーやセー学派の自由放任の主張と対立することもワルラスは強調している。

## 2. イギリス古典派とワルラスー古典派 v s 新古典派の図式をこえて

シュンペーターが指摘するように、ワルラスはアダム・スミスをはじめとするイギリス古典派の経済学者たちに、形式的な敬意ははらっているが、その経済学形成過程においてうけた直接的な影響はほとんど見当たらない。しかし、「古典派 v s 新古典派」という現代的な図式にたって、イギリス古典派との比較で、ワルラスの経済学の特徴をとらえようとする、研究者たちはやはり多い。

### 1. アダム・スミス

ワルラスは、青年時代、父から受け継いだ稀少性価値論の正当性を説くにあたって、多くの古典派経済学者たちの学説を引用した。アダム・スミスの労働価値論にも言及したが、興味深いことは、ワルラス父子は、それが、ケネーの狭い富観を超えるものだとは考えていないことである。土地の生産物のみを富とした、ケネーを批判するが、労働生産物のみを富としたアダム・スミスに対しても同じように批判するのである。土地と労働（インダストリーを含む）は、二つの根源的な富であり、その意味でスミスとケネーは統合されなければならない。それを可能にするのが稀少性の価値理論であるとワルラスは考えていた。

土地自体に価値があることを認めない学派は、すべての富の所有を個人の私有に帰することになってしまったと、ワルラスはいう。この批判は、イギリス古典派の分配理論一般にも向けられる。

### 2. リカードと J.S.ミル

ワルラスが父オーギュストから受け継いだ「進歩する社会における価格変動の法則」は、資本蓄積と人口増加にともない、地代と地価だけが上昇し、賃

現は一定、利子率は低下するというものである。これは、『純粋経済学要論』の後半部分におさめられ、この動的な法則が、ワルラスの純粋経済学においてどのような意味を持つのかというのが、有名なジャッフェ＝森嶋論争のテーマであったが、この法則が、ワルラスの純粋経済学設立の動機の一つであることは間違いない。

この法則が一見したところ、リカードの分配法則に類似していることから、森嶋はさらにワルラスとリカードの類似点を指摘し、ワルラスを「古典派」とまで言い切った。一方、ワルラス自身は、リカードの差額地代論と J.S.ミルの賃金基金説に対しては、晩年まで激しい批判を展開していた。

この謎を解くためには、ワルラスの社会経済学の出発点になっている、ワルラス父子の反社会契約論的な社会観にまで目を向ける必要がある。また同時に、「価値変動の法則」の根拠となっている価値理論が、イギリス古典派とはまったく異なることを確認する必要がある。そして地代、賃金、利子が他の生産物の価格決定と同じ原理で決定されるという、いわゆる「新古典派」的な特徴をもった理論にワルラスが到達したのは、実は、ワルラスの社会経済学における政策的な主張や、それを支える社会観が決定的な役割を果たしていることを忘れてはならないであろう。

## むすびにかえて

以上のような論点から、ワルラスは、過去の経済学説を検証するにあたって、純粋経済学のみ独立した考察を決して行っていなかったことがわかる。彼にとって経済学とは、あくまでも現実社会において効率と公正が両立するシステムを実現するための手段であり、純粋経済学に対する並々な熱意も、そのようなワルラスの使命感からも理解できる。

さてこのような観点から、ワルラスは、自分自身の経済学史への貢献をどのように考えていたのか。ワルラスの亡くなる前年に出版された友人シャルル・ジッドの『経済学説史』(1909)へのコメントを紹介し、この報告を終えたい。

(当日、フルペーパー配布予定)